



上杉謙信：常安寺蔵



直江兼統：新潟県立歴史博物館蔵



常在戦場：山本五十六記念館蔵



良寛：安田毅彦画
良寛記念館蔵

越後・長岡の偉人「語録」

「生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり」
たちが生命を燃焼させる上で、時に指針となるも
あります。もちろん優れた人材を輩出した越後・
長岡にも、先人たちの多くの金言が残されていま
す。それらの言葉に力を得て、日々を大切に過ご
すかですが、その一部をここに掲げさせていただきます。

という島崎藤村の言葉通り、先人の名語録は、私
のであり、また背中を押してくれる大きな力でも
長岡にも、先人たちの多くの金言が残されていま
さなければいけないのではないかと思います。わか
きました。ご参考になれば望外の幸せです。

大将の根底とするところは、仁義礼智信の五を規とし、慈愛をもって衆人を憐れみ……

『北越軍談』謙信公語類

義に生きた越後の軍神・上杉謙信の、リーダーが自ら養うべき基本的かつ最も大切な資質。享禄3年（1530）に生まれた長尾景虎（のち上杉謙信）は長じて、宿命の敵・甲斐の武田信玄との度重なる戦いを含め、49歳でその生涯を終えるまで、ほぼ負けなしというほどに強かったといえます。その謙信の言葉ですから、重みがあります。河井継之助や、山本五十六にもその精神は受け継がれ、ある意味では、越後人・長岡人の血肉になっているかもしれません。

百姓もろもろの業をなし、万物をよく作りだし候へば、みな人餓者なく、かじけものもなし

『地下人上下共身持之書』いわゆる直江兼統の『四季農戒書』12月の項より

「かじけもの」とは、「怠け者」という意味であるといいますが、「手がかじかむ」という言葉があるように、寒さに凍えて思うように動かなくなることから、進んで仕事をしようという気がなくなることでしょう。文武両道を極めた、上杉景勝の執政・直江兼統は、農業にもやたら詳しく、たとえそれが農民に年貢を納めさせるための方策であったにしても、「勤勉」を説いたこの言葉は、後世の私たちににとっても耳を傾けるべき金言といえます。

常在戦場

越後長岡藩・牧野家家訓

参州（三河）牛久保の壁書の第一に掲げられ、引き継がれてきた牧野家の家訓で、現代の長岡にも脈々と息づいている伝統です。牧野家の参州牛久保は、常に周りを敵に囲まれていて、文字通り常在戦場の地でした。その家訓は、北越戊辰の戦いに敗れ、住むに家なく食うに事欠く長岡藩士を説き伏せ、「米百俵」を学校設立に用立てた小林虎三郎の一言で甦ります。艱難に立ち向かう武士の心得こそ、明日を創るのです。掲げた書は、山本五十六元帥の自筆です。

形見とて 何残すらむ 春は花

夏ほととぎす 秋はもみぢ葉

良寛の「歌」

「辞世」の歌ともいわれる良寛の“四季への賛歌”。宝暦8年（1758）に生まれ天保2年（1831）74歳で亡くなるまで、織細で優しく、しかし芯の強い良寛は、ただ単に自然を残したいと思ったのではなく、自らが生きた風土、そこに生きた人々のすべてを含め、慈しみ愛することが大切だと言いたかったのではないのでしょうか。厳しい市場経済社会の中で、我を張り、利だけを追い求めたりしがちな私たちに、足るを知り、節度を求め、バランス感覚を保つことを、良寛は教えてくれます。

身を棺槨（かんかく）の中に投じ、地下百尺の底に埋了したる以後の心にあらずんば、ともに天下の経綸を語るべからず

河井継之助

棺槨とは棺桶のこと。人間、死後の評価などは気にしてはならない。堅い信念を持って、良いと思ったことは、今、人のため社会のため、天下のために断固としてやらなければならない。陽明学に傾倒し、備中松山の山田方谷に学んだ河井は、やはり行動の人であり、破綻していた長岡藩の財政を極端な緊縮政策で立て直し、一方で産業振興、文武奨励、富国強兵という藩政改革に、短兵急ともいえるほど邁進しました。河井をめぐる毀誉褒貶は、北越戊辰戦争の敗戦責任を含め、現在も続いています。

この百俵は、今でこそただの百俵だが、後年には一萬俵になるか、百万俵になるか、はかり知れないものがもがある。いや、米だわらなどでは、見積もれない尊いものになるのだ。その日ぐらしでは、長岡は立ちあがれない。あたらしい日本はうまれぬぞ

小林虎三郎／山本有三著「米百俵」より

幕末の北越戊辰戦争に負け、貧窮に喘いでいた長岡藩に、支藩の三根山藩より贈られてきた百俵の米。その貴重な米を藩士に分け食べるのではなく、学校開設の資金の一部にしたという「米百俵」の故事を、作家山本有三は戯曲にしました。長岡はこの故事を今でも忘れず、教育・人材育成の原点に据えています。ならば、もっともっと多彩な人材と、国際的に通用する器の大きい人物を養成すべく、私たちは懸命に努力を重ねる必要があるのではないのでしょうか。

智者の一言は千金の値あり

岸宇吉

少年の頃小林虎三郎の薫陶を受け、計算に優れ、明治期の長岡産業経済界のリーダーとなった岸宇吉は、北越戊辰戦争後の荒廃した長岡を復興させるため、武士・町人・農民などの身分にとらわれない勉強会「ランプ会」を主宰。進取の気性あふれた岸は、三島億二郎らと北越殖民社を設立、北海道移民に尽力したり、福沢諭吉らと相談し、六十九銀行を創立、支配人として活躍するかたわら、渋沢栄一とも親交を重ねるなど、見聞を広め、私心を捨てて多彩な事業に挑戦しました。

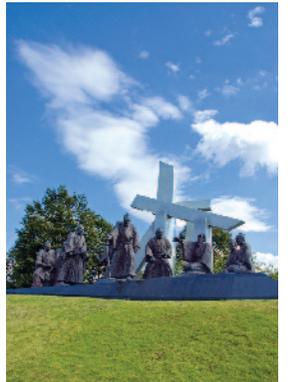
やって見せ、言ってみせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ

山本五十六

軍人として、いち早く石油・航空機の重要性を説き、世界各国の国情をつぶさに見つめた山本五十六は、三国同盟に体を張って反対しながら、開戦に至っては、連合艦隊司令長官として国の命運をにない、乾坤一擲の作戦を展開。しかし、願っていた「講和」を見ることなく昭和18年4月18日戦死しました。「何事か成さざればやまず」という、とてつもない集中力と持続力で、計画通りの勉強と実践を繰り返した元帥は、部下や後進の指導に当たっても、実に丁寧に接しました。



河井継之助：長岡市立中央図書館蔵



米百俵の群像：撮影 稲垣政雄



岸宇吉：長岡市立中央図書館
文書資料室蔵



山本五十六：山本五十六記念館蔵